

絵葉書にみる有馬温泉の観光地化

近本 正子

はじめに

当館では「有馬」に関する絵葉書を複数所蔵している。有馬町は日本最古の温泉地の一つといわれ¹⁾、太閤秀吉ゆかりの地として有名な有馬温泉を中心とした地域である。六甲山北側の北区有馬町に位置する有馬温泉は、関西の「奥座敷」として親しまれている。歴史が深く見どころの多い有馬町には、「温泉寺」「極楽寺」「念仏寺」「湯泉神社」などの由緒ある寺社があり²⁾、多くの観光客が訪れている。絵葉書から読み取れる情報は多くはなく、資料の作製時期や伝来などが不明なものも多いが、その被写体を通して、「湯治場」から「観光地」へと変化を遂げてきた近現代の有馬の姿と交通の発達をみることができる。

Ⅰ 絵葉書の題材としての有馬

(Ⅰ) 有馬温泉の歴史

有馬温泉には神代の昔、「三羽の鳥」が湧き出る湯に傷を浸して癒すのを見た大己貴命・少彦名命おのおのむちのみこと
すくなひこなのみことにより発見された温泉といわれている³⁾。舒明天皇や孝徳天皇が御幸したと『日本書記』に記されている由緒ある温泉である。724(神亀元)年、行基が薬師如来のお告げにより有馬の地に一寺三院を建立するとともに、温泉を掘削・再興し、大いに繁栄したといわれている⁴⁾。しかしその後、六甲山の水害により長きにわたり、衰退する。1191(建久二)年、奈良吉野の僧である仁西上人が、熊野権現のお告げにより有馬に来て温泉を修築し、薬師堂を再興し、薬師如来の十二神将にちなむ十二の坊舎を設けた⁵⁾。それ以後有馬温泉は賑わいを取り戻した。現在有馬温泉の旅館に坊の名が多いのはこのことに由来している。

①(有馬名勝)薬師寺本堂 (No.8-10)

図1の絵葉書には、「Arima Meisho」「(有馬名勝)薬師寺本堂」と書かれている。行基が創建したという温泉寺は、当館所蔵の絵葉書には、「薬師寺本堂」や「温泉寺薬師堂」などの解説文が付けられている。



図1(有馬名勝)薬師寺本堂

②(有馬名勝)秀吉公袖石 (No.8-1)

当館所蔵の有馬の絵葉書には「秀吉公袖石」「瑞宝寺境内の奇岩豊公基盤の石」を題材としたものがあり、有馬温泉を愛した豊臣秀吉が幾度となく訪れ、関係が深かったことがうかがえる。

江戸時代日本の温泉地を「東之方」と「西之方」に分け、相撲の番付に見立てた「諸国温泉効能鑑」に、「東の大関」は草津温泉、「西の大関」には有馬温泉が位置付けら

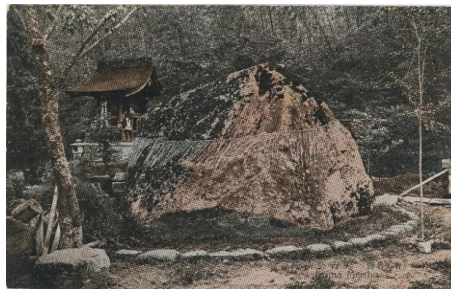


図2(有馬名勝)秀吉公袖石

れている⁶⁾。このことから有馬温泉が高い人気を誇っていたことがわかる。

(2) 有馬温泉泉源と開発

有馬温泉には狭い範囲に泉質が湧出し、温度も高温から低温までさまざまで「金泉」「銀泉」「炭酸泉」「ラジウム泉」の四種類がある。

「金泉」は、鉄を含む塩分濃度の濃い温泉で、泉質は「強塩化物泉（含鉄・ナトリウム塩化物強塩高温泉）」である。非常に高温で、湧出時は無色透明であるが、後に鉄が酸化し赤褐色に変化する。有馬温泉を代表する温泉である。

「銀泉」は鉄をほとんど含まず、金泉のように赤褐色に変色しない。比較的中温度のものが多く、泉質は「塩化物泉（ナトリウム塩化物中温泉）・炭酸水素塩泉」である。

「炭酸泉」は無色透明の低温で、泉質は「単純二酸化炭素」である。

「ラジウム泉」も無色透明で、三〇度前後の比較的低温の温泉で、泉質は「放射能泉」である。

神戸市が所有・管理しているのは、七泉源で、いわゆる「金泉」は「天神泉源」「御所泉源」「極楽泉源」「妬泉源」の四泉源である。神戸市と神戸電鉄が出資している株式会社有馬温泉企業が所有・管理しているのは、「金泉」の「有明一号泉・有明二号泉」の二ヶ所である。これらの「金泉」の泉源のうち、有明一号泉以外は、戦後開発された。観光資源の復興・開発を緊急の課題として有馬温泉の観光復興・開発を進め⁷⁾、1949（昭和24）年に天神温泉や御所温泉などの掘削に成功し、今まで外湯しかなかった有馬温泉に「旅館の内湯」が誕生した⁸⁾。

(3) 有馬温泉の観光地化への歩みと「森林公園ト有馬温泉風景利用策」

③ 摂津有馬ラジウム温泉 (No.305-14)

図3の絵葉書はインドサラセン近世様式を取り入れた洋館ラジウム温泉である。絵葉書の右上部分に「Arima Spa. 有馬名所」、右下部分に「ラジウム温泉浴場」と書かれている。瑞宝寺跡奥の六甲川の川岸に湧出する源泉から温泉を引き、1915（大正4）年に有馬鉄道株式会社（1919年国有、1943年廃線）の「有馬―三田」間の開通と同時に有馬駅の北に建設・開業された。

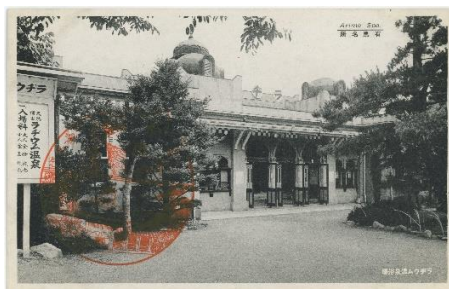


図3 摂津有馬ラジウム温泉

しかし1938（昭和13）年7月の阪神大水害で、ラジウム温泉は流出した。2001（平成13）年に炭酸泉とラジウム温泉を混ぜ合わせて、「銀の湯」として蘇り、親しまれている⁹⁾。

有馬温泉のラジウム温泉や天然の資源を活用し、観光地へと導いた人物の一人に本多静六博士がいる。本多静六博士は日本の林学者で「公園の父」として知られ、博士は神戸市でも重要な役割を果たした。特に六甲山の植林事業において、土砂災害の防止にも貢献し、その功績が際立つ。博士は有馬町長・有井武之介と有馬鉄道会社社長・山脇延吉の協力のもと有馬温泉の調査をし、観光地としての活性化に尽力している。

当館所蔵の本多静六博士による講話『森林公園ト有馬温泉風景利用策（大正5年11月14日有馬町役場ニ於テ）』（本多静六講話、有馬町役場、1916年12月）には本多静六博士の有馬町役場での講演内容が記されている。

此有馬附近一帯ノ地ノ如キ阪神両市ノ如キ大都会ニ接近シ天然ノ山水風景ニ富ミ加フルニ最モ古ク最モ有名ナル温泉デ太閤肥大ニハ二千戸（今ハ三百戸）アリシト稱セラルル程繁盛セル歴史的温泉ト豊富ナル「ラジウム」鉱泉ヲ有スル点ニ於テ此ノ天然ノ恩恵ヲ利用スルノ方策ヲ講ゼザルハ實ニ有馬町並ニ其附近村落ノ不利益ナルノミナラズ延イテ兵庫県並ニ大日本帝国ノ不利益デアリマス

有馬地域の風景や温泉などの「天然の恩恵」を利用する方策を講じないことは日本にとって不利益だと講演会で語っている。そしてそのためには、交通の発達が重要であると具体的な方策を述べている。また観光プランをたて、一日・二日・三日かけて巡るルートも示している。その他新道、新設備、眺望と植物、街の整備、保勝会についても提案している。

「欧米ニハナイ幸ニ有馬ニハ附近ニ天然ノ阪道ガ沢山アルカラ温泉ハ朝トタニニ度クライニシテアトハ山巡リヲナシテ真ニ健康ヲ増進セシムルヨウ指導シ設備スル必要ガアル今回ノ風景利用策ノ諸設備ニハコノ点ニオイテモマタ有益ナルヲ信ズルモノナリ」と結んでいる¹⁰⁾。

2 観光促進のための絵葉書

1) 絵葉書にみる有馬の名所・名勝

有馬には温泉地として発展した歴史があり、また人々の娯楽として観光名所となる風景が数多くある。当館所蔵の有馬の絵葉書から絵葉書の題材となった風景を遺物・史料、交通、寺社、施設、街・風景、名所、山・川のテーマで分類すると次の表となる。当時注目されていた有馬の観光名所をみることができる。表1は当館所蔵の有馬の絵葉書から絵葉書の題材となった風景を遺物・史料、交通、寺社、施設、街・風景、名所、山・川のテーマで分類した表である。

表1 当館所蔵の「有馬」を題材とした絵葉書

テーマ	絵葉書の資料名称
遺物・史料	(高級二色 有馬名勝) 秀吉公袖石、(有馬名所) 有馬袂石、(有馬名勝) 鳥地獄、有馬名勝 虫地獄、(有馬名所) 天狗岩・虫地獄、摂津有馬天狗岩、国宝三体 毘沙門天王 吉祥天 地藏尊 兵庫県有馬郡長尾村多聞寺に安置す、有馬郡山口村特種物産 竹製品年産額三十二万円 藤製品年産額十二万円 寒天年、有馬温泉古図(二百二十年以前)
交通	神有電鉄有馬駅、(有馬名勝) 神有電鉄有馬駅、有馬名所 神有駅附近、(有馬名所) 神有駅附近
施設	有馬町高等温泉、(有馬名勝) 六甲ホテル附近、有馬兵衛川之別荘、有馬兵衛旅館内湯、有馬兵衛紅葉溪別荘、有馬名勝 湯の町本温泉、有馬ホテル、有馬名所 炭酸温泉場、(有馬名所) 炭酸温泉、摂津有馬炭酸温泉、(有馬名所) 炭酸温泉場、有馬温泉 湯の町、有馬温泉、摂津有馬本温泉、(有馬名所) 赤温泉浴場、摂津有馬ラジウム温泉、有馬だより(有馬名勝) 赤温泉浴場、摂津有馬停車場、(有馬名所) ラジウム温泉浴場
寺社	(有馬名勝) 瑞宝寺境内日暮の庭、(有馬名勝) 瑞宝寺境内、有馬瑞宝寺、有馬瑞宝寺、有馬名所 瑞宝寺境内の奇石豊公基盤の石・瑞宝寺、有馬名勝 瑞宝寺境内、(有馬名所) 瑞宝寺境内の奇石豊公基盤の石・瑞宝寺、摂津有馬瑞宝寺、摂津有馬瑞宝寺、(有馬名勝) 薬師寺本堂、(有馬名勝) 薬師寺本堂、有馬だより(有馬名勝) 温泉寺薬師堂、(有馬名所) 温泉寺薬師堂、摂津有馬薬師寺、摂津有馬薬師寺、(有馬名勝) 温泉神社、有馬名勝 温泉

	神社、(有馬名所)湯泉神社、(有馬名勝)金島城山妙見宮、(有馬名所)妙見堂・稲荷神社、摂津有馬妙見宮摂津有馬妙見宮
街・風景	(有馬名勝)有馬町全景、(有馬名所)全景、有馬全景、(有馬名所)街景、有馬兵衛紅葉溪別荘より眺めたる有馬全景、(有馬名所)聖天歓喜天の山上より有馬温泉を望む、(有馬名勝)有馬町湯の町、(有馬名勝)改造せる温泉街、摂津有馬入口、[有馬]、有馬名勝 有馬町全景、(有馬名勝)杖捨橋より妙見山の遠望、有馬郡山口村有馬富士の全景 戦国時代郷士山口五郎左へ門所領三千石を領せし城跡にて現今稲荷社稲倉魂命を祀る海拔三百八十五米、摂津有馬全景、摂津有馬七曲街道風景、有馬だより(有馬名勝)街景、泉郷”有馬”、[有馬]、摂津有馬落葉山より有馬富士の望遠、有馬だより(有馬名勝)蓬来峡、(有馬名勝)裏六甲の奇勝有馬口、六甲有馬ドライブウェイ
名所・名勝	(有馬名勝)夫婦瀧、有馬名勝 夫婦瀧、(有馬名勝)夫婦瀧、摂津有馬夫婦瀧、(有馬名所)夫婦瀧、(有馬名所)鼓ヶ瀧、有馬鼓ヶ瀧、摂津有馬鼓ヶ瀧、摂津有馬鼓ヶ瀧、(有馬名勝)霊泉、有馬名勝 霊泉、(有馬名所)有馬炭酸水湧出場、有馬名勝 霊泉、摂津有馬炭酸湧出場、(有馬名所)天然炭酸泉湧出場、(有馬名勝)栄砒泉、(有馬名勝)栄砒泉、(有馬名所)杖捨橋、有馬名所 杖捨橋

④温泉起源略起(No. 46-7)

図 4・5の絵葉書には温泉街を訪れる観光客と思われる人々がみられ、説明文には次のように書かれている。

温泉起源畧記 有馬温泉は遠く時代の昔にあり帝の行幸と共に古今地名の士の常温泉を選び以て其名天下に高し土地高燥にして四面麗山を廻し眺望絶佳四季共に都人士の浴客絶ず今また三層樓の新装なり

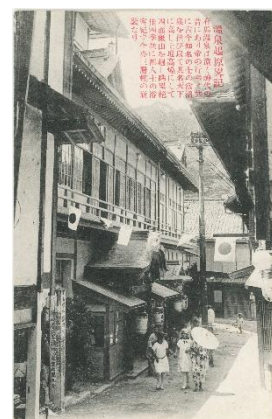
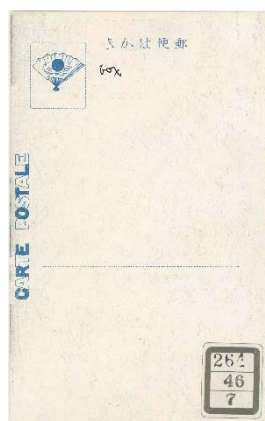


図 4 温泉起源略起(表) 図 5 温泉起源略起(裏)

有馬温泉の魅力をその歴史とともに宣伝し、観光客を増やすねらいがあったと思われる。当館所蔵の有馬温泉の絵葉書は複数枚セットになっているものが多く、4枚から23枚セットなどさまざまであり、すべて揃っていないものも多い。絵葉書の製作時期は正確にはわからないものが多いが、おそらく昭和戦前と思われる。発行者は有馬温泉内湯兵衛旅館、神戸新名所選定委員会、神戸市経済局観光課、神戸史談会出版部、不明などである。

表 2 は当館所蔵の絵葉書の資料名称から、同じ被写体を集計した表である。枚数の多い被写体には瑞宝寺の庭、有馬全景、有馬炭酸水湧出場(霊泉)、赤湯温泉場、夫婦瀧、鼓ヶ瀧などの観光名所が見られる。これらの観光名所は 1769(明和六)年に河上維姜が選んだ和歌に円満院門跡が絵を描いた『有馬六景』の影響が大きいと言えよう。「有馬六景」とは鼓ヶ瀧の松嵐、落葉山の夕照、温泉寺の晩鐘、功池山の秋月、有馬富士の暮雪、有明桜の春望のことである¹¹⁾。

表 2 当館所蔵の有馬温泉絵葉書の同じ被写体の集計表

被写体	資料名称【シリーズ No.】	枚数
瑞宝寺境内日暮の庭	(有馬名勝)瑞宝寺境内日暮の庭【8】、(有馬名勝)瑞宝寺境内【9】、有馬瑞宝寺【46】、有馬瑞宝寺【46】、有馬名勝 瑞宝寺境内 【70】、有馬名所 瑞宝寺境内の奇石豊公基盤の石・瑞宝寺【147】、摂津有馬瑞宝寺【260】、摂津有馬瑞宝寺【261】、(有馬名所)瑞宝寺境内の奇岩豊公基盤の石・瑞宝寺【305】	9
有馬全景	(有馬名勝)有馬町全景【6】有馬兵衛紅葉溪別荘より眺めたる有馬全景【10】、有馬全景【46】、有馬名勝 有馬町全景【70】、有馬郡山口村有馬富士の全景 戦国時代郷土山口五郎左へ門所領三千石を領せじ城跡にて現今稻荷社稻倉魂命を祀る海拔三百八十五米【220】、摂津有馬全景【260】、(有馬名所)全景【306】、有馬だより(有馬名勝)街景【316】	8
有馬炭酸水湧出場(霊泉)	[霊泉]【8】、(有馬名勝)霊泉【9】、(有馬名所)有馬炭酸水湧出場【46】、有馬名勝 霊泉【70】、有馬名所 炭酸温泉場【147】有馬名勝 霊泉【212】、(有馬名所)有馬炭酸水湧出場【46】、有馬炭酸水湧出場(霊泉)炭酸水【206】	7
赤湯温泉場	(有馬名所)赤湯温泉場【305】、有馬だより(有馬名勝)赤温泉浴場【316】、有馬町高等温泉【8】、(有馬名勝)有馬町湯の町【8】、有馬名勝 湯の町本温泉【70】、有馬温泉 湯の町【186】	6
夫婦瀧	(有馬名勝)夫婦瀧【8】、(有馬名勝)夫婦瀧【9】、有馬名勝 夫婦瀧【70】、摂津有馬夫婦瀧【290】、(有馬名所)夫婦瀧【305】	5
鼓ヶ瀧	有馬鼓ヶ瀧【8】、摂津有馬鼓ヶ瀧【260】、摂津有馬鼓ヶ瀧【261】、(有馬名所)鼓ヶ瀧【305】、	4

⑤瑞宝寺境内日暮の庭(No.8-8)

当館所蔵の絵葉書の中で、同じ観光名所を対象とした絵葉書のうち特に枚数の多いものが、「瑞宝寺境内日暮の庭」(図6)である。絵葉書には「(有馬名勝)瑞寶寺境内日暮の庭 Arima Meisho.」と説明文が書かれている。「瑞宝寺境内日暮の庭」は太閤秀吉がその庭の眺めを「いくら眺めていても飽きない」と褒めたたえたといわれる風景で、古くから有馬温泉を代表する名所である。毎年秋になると紅葉の下で秀吉を偲ぶ野点が行われる。



図6 瑞宝寺境内日暮の庭

⑥有馬全景(No.8-6)

図7の絵葉書には「(有馬名勝)有馬町全景 Arima Meisho.」と説明が書かれている。山間にある有馬温泉を一望したもので、当時の様子がうかがえる。有馬温泉は狭い範囲にさまざまな温泉

が楽しめるという、他の温泉地にはみられない特徴がある¹²⁾。



図 7 (有馬名勝) 有馬全景



図 8 (有馬名勝) 霊

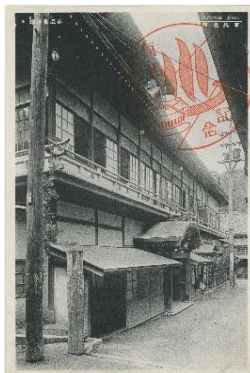


図 9 赤湯温泉場

⑦ (有馬名勝) 霊泉 (No.9-6)

図 8 は写真の説明文に「Arima Leisen (有馬名勝) 霊泉」と書かれている。1886 (明治 19) 年、炭酸泉を雨水から守るため地元有志により上屋が建てられ、翌年には、炭酸泉浴場が設けられた。炭酸泉浴場は、1923 (大正 12) 年、当時の有馬町が民間に賃貸し、三階建てになり、1970 (昭和 45) 年まで続いた。また、サイダー製造のため、1900 (明治 33) 年に有馬鉱泉合資会社が設立された¹³⁾。

⑧ 赤湯温泉場 (No.8-6)

図 9 は、「Arima Spa 有馬名所 赤湯温泉浴場」と書かれ、温泉マークのある有馬記念というスタンプが押されている。同じ被写体の絵葉書の説明文には「高等温泉」「湯の町」「本温泉」と書かれたものもある。

江戸時代から続いている共同浴場は 1883 (明治 16) 年にオランダ人クレーツ氏の設計により「洋館二階建て」で建築されたが、傾くなどがあり 1894 年に元の「宮殿づくり平屋建て」に改装された。その後、1961 (昭和 36) 年 4 月鉄筋コンクリート造りに改築し、神戸市立有馬温泉会館となった。現在外湯は「金の湯」「銀の湯」のみ存在している¹⁴⁾。

⑨ 夫婦瀧 (No.8-2)

図 10 の説明文には「(有馬名勝) 夫婦瀧 Arima Meisho.」と書かれている。夫婦瀧は六甲ケーブル乗り場方面にある鼓ヶ瀧の上方に位置し、寄り添う夫婦のような美しい瀧である。夫婦瀧を見るには舗装されたルートがなく、気軽に見に行くことは難しい。



図 10 夫婦瀧



図 11 鼓ヶ瀧

⑩ 鼓ヶ瀧 (No.8-5)

図 11 の説明文には「有馬 鼓ヶ瀧 Tsutsumigataki」と書かれている。瀧の音が

鼓を打つ音に似ていたことからその名がついたといわれている。現在は岩の配置が変わり、その音は聞くことはできないが力強い水音を響かせている。

(2) 有馬の鉄道と自動車運送事業の発達

①神有鉄道有馬駅(No.8-7)

図12は神有鉄道有馬駅である。の右下に「神有電鐵有馬驛」、その下に「Shinyu Arima eki」と英字表記されている。1928(昭和3)年11月、神有鉄道の湊川―有馬間が開業され、運転が開始された。所要時間はおよそ50分で、有馬温泉に行くのが非常に便利になった。

②六甲有馬ドライブウェイ(No.185-6)

1928(昭和3)年に、裏六甲ドライブウェイ、翌年には、表六甲ドライブウェイが開通し、市街地から記念碑台を經由して有馬温泉に行くことができる自動車道が完成した。1938年の「阪神大水害」で被害を受けるまで運行された¹⁵⁾。

表六甲ドライブウェイは1953(昭和28)年に公共事業としての着工したものの、財源に余裕がなく、建設資金がつかない事態となった。有料道路に変更すれば市債の起債が可能になることから、表六甲ドライブウェイは有料道路として再建されることになった。有料道路の収益が裏六甲ドライブウェイ、六甲山トンネル、山麓バイパスと、次々と有料道路を建設していくことに活用された¹⁶⁾。

③改造セル温泉街(No.9-2)

温泉街にずらりと並んだ自動車が印象的な絵葉書(図14)には「Arima Meisho.(有馬名勝)改造セル温泉街」と説明が付されている。有馬温泉に自動車を利用して訪れる観光客が増加したことがわかる。

1905(明治38)年7月、有馬自動車株式会社が有馬温泉と阪鶴鉄道三田駅との間の運転を開始したが、シーズンオフには乗客がなくなるなど、一年足らずで運行が終わってしまった。1913(大正2)年、「有馬―三田」間の乗合自動車が運行されたが、収支が償わず約一年後に運行を止めている。翌年9月、宝塚―名塩間のバスを、山口經由で有馬温泉へと路線を延長した。同年、平野から有馬街道を通って有馬温泉まで、乗合自動車の営業を始めた。しかし、道路事情や有馬温泉の開散期の減収など諸般の事情により営業は順調にはいかなかった¹⁷⁾。

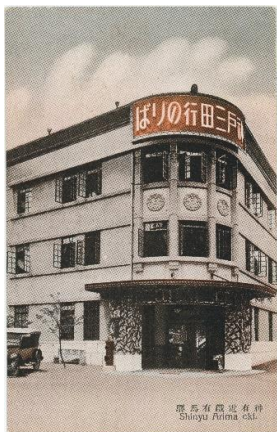


図12 神有電鐵有馬駅

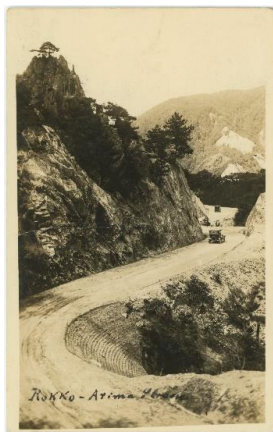


図13 六甲有馬ドライブウェイ



図14 改造セル温泉街

(3) 神戸市の観光事業の発展と有馬温泉

⑭[神戸風景]有馬全景(No.210-7)

図15は神戸市経済局観光課が発行した神戸市の絵葉書綴の表紙である。絵葉書はキリトリ線入りで、一枚ずつ切り離して使用することができる。表紙の布引の瀧の絵は小松益喜の作品である。小松益喜(1904-2002)は高知市に生まれ、東京美術学校を卒業後、郷里の高知に戻る。再び上京を決心し、神戸に立ち寄った小松は、神戸の街並や異人館に魅せられ、そのまま神戸に住み制作を続けることになった¹⁸⁾。

絵葉書の右下には神戸市経済局観光課と書かれており、七枚綴りになっている。表紙も絵葉書として使用することができる。裏面(図16)には各絵葉書の説明文が記載され、図17の有馬全景について次のように書かれている。

有馬温泉(神戸電鉄有馬駅下車)

裏六甲の峽間に、千古の霊泉をたたえて、古くからその名をうたわれた湯の町有馬は、100度という高温の温泉が豊富に湧き出て、湯けむりの間に広重えがく浮世絵のように周囲の連峰がくっきりと繊細な線で浮かび、溪流のせせらぎにも泉郷の自然美が躍動しています。(写真は落ち葉山から)

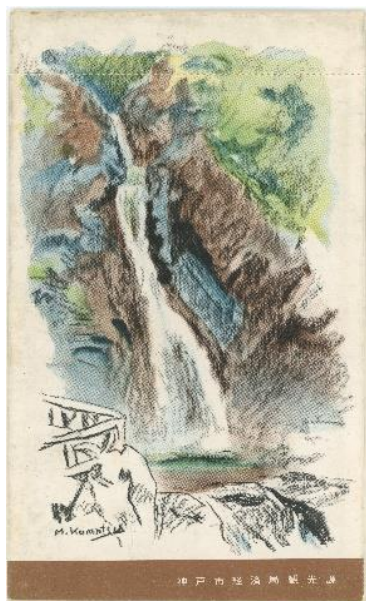


図15[神戸風景]



図16 説明文

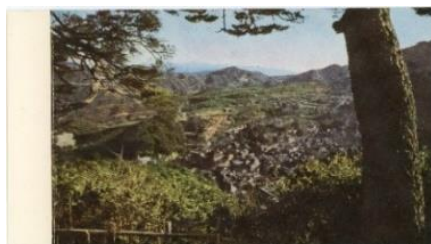


図17 有馬全景

おわりに

戦後神戸市の観光行政の復活は早く、1949(昭和24)年には、経済局貿易観光課となり、翌年には、貿易課と観光課に分離され、「観光」は、経済政策のなかでも重要な役割を担うことになっていった¹⁹⁾。「有馬」の絵葉書は被写体から、当時の人々の興味関心を集めた有馬の名所・名勝、温泉、近代的な施設、新しい交通手段といった風景を知ることができる。その被写体を通して、観光地へと変化を遂げた近現代の有馬の姿と交通の発達をみることができる。絵葉書は手に取った人が訪れたいくなるような「広告」の役割を果たしていたといえよう。

注

- 1) 風早恂編著『有馬温泉史料 上巻』有馬温泉史料刊行委員会、1981年
- 2) 神戸市 HP <https://www.city.kobe.lg.jp/kuyakusho/hokushin/shokai/arima.html>
- 3) 田中芳男著『校訂有馬温泉誌 全』松岡儀兵衛、1894年
- 4) 小沢清躬著『有馬温泉史話』五典書院、1938年
- 5) 新修神戸市史編集委員会『新修神戸市史生活文化編』第二章第三節「有馬温泉の発展と課題」神戸市、2020年
- 6) 同前
- 7) 1948年有馬町が神戸市に合併されるとともに、有馬温泉の開発が行われた。
- 8) 注5に同じ
- 9) 同前
- 10) 本多静六講話『森林公園ト有馬温泉風景利用策 大正五年十一月十四日有馬町役場ニ於テ』有馬町役場、1916年
- 11) 有馬郡編『有馬郡誌 上』有馬郡誌編纂管理者、1929年。同書によると「有馬六景」は「鼓瀑松嵐、落葉山夕照、温泉寺晚鐘、功池山秋月、有馬富士暮雪、有明桜春望」である。
- 12) 注5に同じ
- 13) 同前
- 14) 同前
- 15) 同前
- 16) 新修神戸市史編集委員会『新修神戸市史 行政編Ⅲ 都市の整備』神戸市、2005年
- 17) 注5に同じ
- 18) 小松益喜『小松益喜（絵画）展－神戸・居留地・異人館』朝日新聞社、1986年
- 19) 注5に同じ